

■怒りを声に

退院するとき、病院の医師に、スモン患者救済のための「スモンの会」をつくろうとしている人がいると紹介され、その運動に参加することになりました。それが1971年10月の大阪スモンの会の結成に至りました。その頃には、スモンは製薬だということがはつきりして、製薬企業と国の法的責任、被害被害者救済、被害の根絶のための裁判が各地で起こりました。

被害とわかったときは、スモン患者の怒りはすごかったです。スモンが感染症だと思われていたことで、私は病院で隔離されましたが、保守的な地域では、スモン患者が出たら、「あそここの家は魔物がいる」と言われ、「この家に近寄るべからず」と書いた紙を家に貼られた人がいました。それで、仕方なく家族ぐるみで村を出て行かないといけなくなった人や、自殺する人もいました。1973年度から私は、大阪スモンの会の事務局長を担いました。

私は、私よりももっと重症で困難な人にも運動に参加してもらいたくて、あるスモン患者の女性の家に泊まりこんで、なぜ私が運動をやり始めたかの話をしました。その方は、結婚し、出産して間もなくスモンを発症すると、夫の親から「子どもは

はきる

第3回 スモンの会の結成

辻川郁子



つじかわ ふみこ／1929年生まれ。38歳の頃に整腸剤キノホルムによってスモンを発症。薬害スモンの運動に参加し、薬害根絶と患者救済のために活動している。スモンの会全国連絡協議会事務局長

■全国的な署名運動を展開

運動の過程で全国各地のスモンの会が小異を捨てて大同団結しようと、1974年3月に、「スモンの会全国連絡協議会（ス全協）」ができました。1975年に、ス全協の全国的なとりくみとして「スモン患者の治療と救済のための100万人署名」が行われました。その頃には制度がなかったので、障害者としての認定、治療法の開発、医療費の負担軽減や生活の補償などを求めた署名でした。

1年後の締切までに32万1777筆の署名と500万円を超えるカンパが集まりました。

署名を集めているときは、スモン

によって、失明した人や身動きがとれない人も、自分たちなりのやり方で参加していました。学生時代の友人に切々と訴える手紙をつけて郵送し、署名への協力をお願いしました。また、その当時は、豆腐屋さんなど物売りがいて、その人に声をかけたら、豆腐屋さんが行く先々で署名を集めてくれたり、町内会の会長に協力をしてもらって、町内会のとりにくみとして集めてくれたり、そんな動きがありました。

自分の運動なので、人任せにはできないし、自分の苦しみを訴えるしかないのです。この憤りをなんとかしたいという思いがありますから、みんな自分たちで一生懸命に文章を書いて、運動に参加していました。



▲患者たちと街頭で訴える辻川さん（左端）